シベリア強制抑留と叶わぬ帰国の夢

杉山　信親(98 歳　中石田)

東京ダモイ(日本へ帰る)の甘言を信じ、終戦後、旧満州国にいた関東軍の軍人や軍属は、肉親の待つ祖国を夢見て各地からシベリア沿海州を目指して、長い行進を始めた。私はハルビンから 24 日も歩いたが、その途中、想像を絶する無残な光景を目撃した。それは道端の水溜り周辺に 10 人くらいの日本人が泥水を啜り、そのまま絶命したらしく、顔を地面につけて倒れており、ソ連のダンプカーが土砂運搬用トラックに積んで走り去った。ところが、数キロ歩いた道端の崖下に多くの日本人が折り重なっているのを見て、先程のトラックに積まれた人たちもいるのではないかと強い怨恨を覚えた。

沿海州に集められた日本人はロシアの労働力として働かされることになり、100 人くらいのグループでラーゲル(収容所)に移動した。ラーゲルでの生活は休日なしで、入浴・洗身・洗濯・着替えもなしで捕虜同然。私が 2 番目に移ったラーゲルでは伐採作業をした。夜はベッドなし、毛布なしで板の間に枯れ草を敷き、服のまま寝るのだが、南京虫とシラミで安眠できず、寒さと疲労でノルマが達成できないと食事が減らされ、倒木の中の虫を食べて空腹を凌いでいた。

そして、私はシラミによる発熱で入院。退院後、深夜の病院で行った日本人死体のトラック積みで痩せ細り、裸のまま凍結した同胞をテコで剥がしながら積んだ時、哀れさと屈辱感で憤怒の涙を流したことを忘れられない。

東京ダモイ(日本へ帰る)を信じて、叶わず、異国の地に淋しく眠る同胞の無念さを慎み、ご冥福をお祈りします。

戦争体験談
を語る
杉山信親さん